

V) 病害虫発生経過の概要及び発生原因の解析

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イネ	葉いもち	遅い	少ない	初発生は平年より遅く6月19日であった。初期の病勢は極めて緩慢で、全般発生期も平年に比べて3半旬遅く、7月第3半旬となった。また、7月第6半旬の梅雨明け以降、高温少雨傾向となったため、病勢は活発化することなく終息した。7月下旬の巡回調査における平均発病率は1.0%と平年値38.8%を大きく下回り、全般の発生量は平年に比べて少なかった。	置き苗での発生地点率は1.6%（平年値4.4%）と低く、伝染源量は少ないものと推察された。例年病勢が活発化する6月の気象は、BLASTAMIによる感染好適日の出現日数はのべ17日（平年値14.4日）とほぼ平年並みとなったが、初期の伝染源量が僅少であったため本病の初期進展に抑制的に作用したものと考えられる。	常習発生地域では、育苗箱施薬や粒剤の本田散布が行われた。なお、前年MBI-D剤耐性菌の確認された地域では当該薬剤の使用が控えられた。
	穂いもち	遅い	少ない	僅かに発生圃場がみられるだけで、全般の発生量は平年に比べて少なかった。	葉いもちの発生が極めて少なく、伝染源量は僅少であったため、発生が抑制されたものと考えられる。	常習発生地域では、育苗箱施薬や本田での粒剤施用が行われた。
	紋枯病	平年並	やや少ない	初発生は平年並みの6月16日に認められた。巡回調査圃場では、7月上旬以降、病勢が活発化した。早生種栽培圃場や7月中旬の集中豪雨で土砂の流入等の被害を受けた圃場では上位進展も活発で、止葉葉鞘にまで病斑形成が及んだ発病程度の高い圃場も散見された。しかし、主要品種コシヒカリを含む全般の発生量は、発病株率、上位進展程度ともにやや低く、平年に比べてやや少なかった。	主要品種コシヒカリを含む全般の発生量がやや低くなったのは、梅雨明け以降少雨傾向が顕著となり、株内湿度が低くなったことによると考えられる。	常習発生地では育苗箱施薬が行われた。また、発生に応じ出穂期までに薬剤散布が行われた。
	ヒトヒウカ	平年並	少ない	5～6月下旬の払い落とし調査では、虫数、発生圃場率ともに低く、全般の発生量も平年に比べて少なく経過した。	越冬量の減少と本田初期害虫との同時防除で発生が抑制されたと考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、出穂時にはいもち・ウンカ類の同時防除が行われた。
	ツマグロヨコバイ	平年並	少ない	第1世代成虫の発生時期は平年に比べてやや遅かった。払い落とし調査では全期間を通して虫数、圃場率とも平年に比べて少なく、吸汁害やすす病などの発生も極めて少なかった。	昨秋の発生量はやや多かったが、今冬期間は低温傾向で越冬量は減少したと推察される。また、4月以降も低温傾向で前半の発生量は少なく、圃場での発生量も平年に比べて少なかった。6月中旬からは気温がやや高く推移し増殖には好適であったが、初期発生量が少なかったため全般に少発生で経過したと考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、出穂時にはいもち・ウンカ類の同時防除が行われた。
	ニカメイチュウ 第1世代 第2世代	- -	少ない 少ない	予察灯及びフェロモントラップにおける誘殺数は極めて少なく、発蛾最盛期は判然としなかった。圃場における被害は第1世代、第2世代ともに少なかった。	近年、発生量は少なく、育苗箱施薬などの防除対策が行われたため、発生が抑えられたものと考えられる。	育苗箱施薬が行われた。
	イネミスジウムシ	平年並	やや少ない	予察灯における越冬世代成虫の初誘殺は、平年並みの5月第1半旬に認められたが、誘殺数はやや少なく、5月下旬の巡回調査では、発生圃場率、被害株率とも平年に比べてやや少なかった。	越冬量の減少と本田初期害虫との同時防除で発生が抑制されたと考えられる。	育苗箱施薬が行われた。多発田では本田防除が行われた。
	セジロウンカ	やや遅い	やや少ない	予察灯での初飛来は平年並みの6月下旬から見られ、6～7月の飛来量は平年並みであった。これに由来する幼虫は7月中旬から発生し、発生量は平年に比べてやや少なかった。	7月中・下旬は気温が低く、降雨が多かったため、第1世代幼虫の発生は抑制された。8月は気温が高く経過し、増殖に好適な状況であった。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、出穂時に葉いもち・ウンカ類の同時防除が行われた。
	トビイロウンカ	平年並	やや多い	予察灯での初飛来は7月6日に認められ、18日には県東部を中心に多飛来が認められた。これに由来する幼虫は8月上中旬から発生し、発生量は平年に比べてやや多かった。収穫期に成幼虫密度が高い圃場が散見され、県東部を中心に坪枯れが発生した。	梅雨明けまでの飛来量は過去10年でH15年に次いで多かった。8月は気温が高く経過し、増殖に好適な状況であった。いもち病の発生が少なかったことから防除機会が減少したことも要因と考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、出穂時に葉いもち・ウンカ類の同時防除が行われた。
コブノメイガ	やや遅い	平年並	予察灯での飛来時期、飛来量ともに平年並みで、次世代の発蛾盛期は8月第4半旬であった。被害株率、発生圃場率はほぼ平年並みであった。	次世代発蛾盛期には、大部分の水稲は出穂しており、その後の被害発生は少なかったものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。	

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イネ	斑点米カメムシ類	平年並	やや多い	畦畔雑草すくい取り（6月下旬：頭数1.7頭/10回振・発生圃場率46%、前年0.4頭・20%）、極早生品種出穂時（7月下旬：10.5頭/20回振・70%、前年5.8頭・73%）、コシヒカリ出穂時（8月上旬：1.8頭・62%、前年1.75頭・58%）の調査では、平年に比べてやや多い発生が認められた。主な発生種はアカスジカメムシ、ホソハリカメムシであった。9月30日現在、うるち玄米総検査数量に対する、カメムシ類が原因の着色粒混入による格落ち数量割合は7.8%である。	昨年の発生量が多く、越冬量も多かったと考えられる。春先から適度な降雨があり、増殖源となる雑草の生育に好適であった。8月の気温が高く、降水量も少ないなど好適な条件が続き、発生量は平年に比べて増加したと考えられる。	8月4日付けで注意報を発表し、圃場管理の徹底や、発生に応じて穂摘い・乳熟期～糊熟期に薬剤散布が行われた。
	フタヒコカガ	平年並	やや多い	6月下旬から中山間部を中心に幼虫による被害が発生した。	昨年の発生量が多く、越冬量も多かったと考えられる。	発生程度や栽培体系に応じて薬剤散布が行われた。
ムギ	さび病類	—	やや少ない	小さび病の発生が6月に認められたが、病勢は緩慢で全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	近年発生量が少ない傾向が続く、菌密度が低下しているものと考えられる。	本病を対象とした薬剤散布は行われなかった。
	うどんこ病	—	平年並	5月下旬に県東部で発生が見られ、全般の発生量は平年並みであった。	—	本病を対象とした薬剤散布は行われなかった。
	赤かび病	—	やや多い	オオムギでは5月下旬の発病率は0.33%と平年値1.0%を下回ったが出穂期の遅いコムギでは発病率が0.79%と平年値0.4%を大きく上回り、発病程度の高い圃場もみられた。全般の発生量は平年に比べてやや多くなった。	コムギでは出穂期が平年に比べて遅れ、4月下旬となったが、その後5月に入り降雨頻度が多くなり、感染機会が増したことから、発病が助長されたものと考えられる。	開花期（オオムギは穂摘期）とその10日後に薬剤散布が行われた。
ダイズ	ハスモンヨトウ	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は8月中旬まで平年の50%以下で飛来は少なかった。その後、累積誘殺数は10月末には出雲市で63.3%、益田市で44.7%と平年に比べ、やや少ない～少ない飛来であった。圃場での幼虫の発生は8月下旬からみられ、発生量は全般にやや少なかった。	成虫の飛来量が少なかったため、幼虫の発生量はやや少なかったものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
ナシ	黒斑病	やや遅い	少ない	病勢は全般に緩慢であり、発生量は、平年より少なかった。	降水量は7月までほぼ平年並みであったが、越冬伝染源が少なかったために発生量が少なかったと考えられる。	袋がけ時期を中心に薬剤散布がよく行われた。以後、収穫期まで薬剤散布が行われた。
	黒星病	やや早い	多い	5月上旬から幼果に発生が見られ、6月の発生量は平年と比べて多くなった。その後も病勢は衰えず、9月まで発生量は平年と比べて多かった。	4月の気温が低く推移し、5月の降雨が多かったために発生量が多くなったものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	ハダニ類	平年並	やや少ない	ハダニ類の発生量は当初やや少なかったが8月下旬に増加したが、その後やや少なくなった。全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	カンザワハダニの越冬量はやや少なく、4～6月の気温も低く推移したため発生量はやや少なかった。しかし、8月は気温が高く、降水量は少なく経過し、増殖に好適な条件が続いたため、8月以降増加したと考えられる。	5月下旬～6月、7月上旬、8月上中旬を中心に薬剤散布が行われた。
	モシクイ	やや遅い	やや多い	フェロモントラップでの越冬世代、第1世代雄成虫の誘殺時期は平年並み、誘殺数はやや多かった。果実の被害は全般には平年並みであった。	前年の発生がやや多く、越冬世代成虫の発生量がやや多かったと考えられる。また、4月、5月の気温は低かったため発生時期はやや遅くなった。発生量はやや多かったが、本県ではほとんどが有袋栽培のため果実の被害は平年並みとなったと考えられる。	ナシヒメシンクイ、ハマキムシ類との同時防除が行われた。
	ナシヒメシンクイ	やや遅い	やや多い	フェロモントラップでの越冬世代、第1世代雄成虫の誘殺時期は平年並み、誘殺数はやや多かった。果実の被害は全般には平年並みであったが、一部被害の多い圃場がみられた。	3月中下旬～4月は気温が低く、越冬世代成虫の発生時期はやや遅くなった。越冬量がやや多かったことから、各世代の発生量はやや多くなったものと思われる。しかし、本県ではほとんどが有袋栽培のため果実の被害は平年並みとなったと考えられる。	小袋掛け前に他害虫との同時防除が行われた。
	アブラムシ類	やや遅い	やや少ない	4月下旬の寄生梢率、寄生程度はやや低く、5月下旬には寄生新梢率、寄生程度ともやや少なくなった。全般の発生量はやや少なかった。	3月下旬の気温が低く経過したため、初期の発生量はやや少なかった。4月以降も低温で経過したためその後も発生量は少なく推移したと考えられる。	5～6月に薬剤散布が行われた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
	ハマキムシ類	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップでのチャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生時期は越冬世代で、平年並みであった。チャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生量はやや少なく、幼虫による被害はやや少なかった。	3月は気温が低く、越冬世代の発生時期はやや遅くなったと考えられる。4月以降の気温も低く経過し、第1世代以降の発生量はやや少なかったと考えられる。	他害虫との同時防除が行われた。
	クワカバラムシ	—	少ない	全般の発生量は少ない。	—	防虫果袋が使用された。
カキ	炭疽病	平年並	平年並	徒長枝での発生は6月下旬から見られた。全般の発生量は平年並みであった。	—	一部に無防除や薬剤散布の遅れた園が見られた。
	うどんこ病	やや遅い	少ない	7月下旬に初発を確認した。全般の発生量は少なかった。	8月から9月上旬は気温が高く降水量も少なく、発生が抑制されたと考えられる。	薬剤散布の回数の少ない園や散布の遅れた園も見られたが、全般には適切な防除がなされた。
	カキミガ	平年並	平年並	果実の被害は一部で多発生圃場が認められたが、全般の発生量は平年並みであった。	防除効果の高い薬剤が適期に散布されたためと考えられる。	各世代発生期に薬剤散布が行われた。
	カキガアザミマ	平年並	平年並	5月10日に被害捲葉の発生を認めた。発生量は平年並みであった。第1世代成虫は6月第2半旬から粘着トラップに誘殺され、誘殺数は平年に比べてやや少なかった。果実被害は7月中旬から見られたが、被害量はやや少なかった。	越冬成虫の飛来量が平年並みであったこと、成虫飛来時期の薬剤散布と被害捲葉の除去などの防除対策により、果実被害の発生量が少なかったと考えられる。	越冬成虫飛来期の薬剤散布と捲葉の切除が行われた。
	カメムシ類	平年並	やや多い	フェロモントラップでは5月2日に、予察灯では5月1日から誘殺された。5月下旬～6月中旬の誘殺数は平年より多くなった。その後、7月下旬～8月上旬にかけて再び誘殺数の増加が認められた。9月に入ると夜温も下がり誘殺数は少なくなった。被害果実は8月下旬から認められ、平年に比べてやや多かった。	昨年はヒノキ毬果が多くカメムシの越冬量も多かった。本年はヒノキの花粉飛散量が平年並み、ヒノキ毬果も平年並みと考えられ、離脱が早いと予測された。しかし、4～6月の気温が低かったことから、増殖が抑制されカメムシのヒノキ毬果からの離脱時期は平年並みとなり、圃場への飛来はやや多くなったと考えられる。	8月中下旬に薬剤による防除が行われた。
夏秋 キャベツ	黒腐病	—	やや少ない	9月下旬になって発生が見られるようになったが、発生量はやや少なかった。	9月は降水量が少なく、発生が抑制されたと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	コナガ	平年並	やや少ない	幼虫の発生量は全般にやや少なかった。	—	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
	ハスモンヨトウ	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月中旬まで平年の50%以下で飛来は少なかった。その後、累積誘殺数は10月末には出雲市で63.3%、益田市で44.7%と平年に比べ、やや少ない～少ない飛来であった。圃場での幼虫の発生は9月上旬からみられ、発生量は全般にやや少なかった。	成虫の飛来量が少なかったため、幼虫の発生量はやや少なくなったものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
冬 キャベツ	黒腐病	—	やや少ない	一部で多発生圃場も散見されたが、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	—	薬剤による防除が行われた。
	菌核病	—	やや少ない	一部で多発生圃場も散見されたが、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	—	薬剤による防除が行われた。
	コナガ	—	やや少ない	幼虫の発生量は全般にやや少なかった。	—	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
	ハスモンヨトウ	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月中旬まで平年の50%以下で飛来は少なかった。その後、累積誘殺数は10月末には出雲市で63.3%、益田市で44.7%と平年に比べ、やや少ない～少ない飛来であった。圃場での幼虫の発生は9月上、中旬からみられ、発生量は全般にやや少なかった。	成虫の飛来量が少なかったため、幼虫の発生量はやや少なくなったものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イチゴ	うどんこ病	—	やや少ない	全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	—	薬剤による防除が行われた。
	アブラムシ類	—	やや少ない	促成、半促成栽培における発生量は全般にやや少なくなりました。	前年秋期のアブラムシ類有翅虫の飛来数は平年並みであったが、本種に卓効の薬剤が使用されたため発生量はやや少なくなったものと考えられる。	定植時とその後は発生に応じて薬剤散布が行われた。
タマネギ	べと病	—	平年並	4月下旬には発病程度の高い圃場も一部見られたが、5月以降は病勢進展は緩慢となり、全般の発生量は平年並みとなった。	越年罹病株は割合が高く、二次伝染源量は多かったが、酸アミド系薬剤の的確な散布により、発生は平年並みになったと考えられる。	越年罹病株の抜き取りと薬剤散布が行われた。
	白色疫病	—	やや多い	例年発生が終息する4月下旬にも県東部を中心に発生が認められた。発病程度の高い圃場も一部見られ、全般の発生量は平年に比べてやや多かった。	4月の気温が低く推移し、また適度な降雨があったため、例年発生が終息する4月下旬にも発生が認められたものと考えられる。	薬剤による同時防除が行われた。
	ボトリチス属菌による葉枯れ	—	平年並	3～4月までは発生量はやや少なかったが、5月に病勢がやや活発化し、全般の発生量は平年並みとなった。	—	薬剤による同時防除が行われた。
	さび病	—	平年並	全般の発生量は平年並みであった。	—	本病を対象とした薬剤散布は特に行われなかった。